

ICTを利用した子どもの村博物館づくり

学校名	学校法人 きのくに子どもの村学園 南アルプス子どもの村小中学校
所在地	〒400-0203 山梨県南アルプス市徳永1717
ホームページ アドレス	http://www.kinokuni.ac.jp/nc_alps/

はじめに

このたびは、当校の教育実践に対して、多大な助成をしていただきありがとうございます。貴財団からのご協力を受けて、学校の設備が充実するとともに、現場が活性化いたしました。その経過をふまえて、成果などをご報告させていただきます。

【内容】

1. 研究をはじめのきっかけ ～体験学習を中心とした学校～

南アルプス子どもの村は、学校法人きのくに子どもの村学園が2010年10月に山梨県に設置した学校です。カリキュラムの中に、「プロジェクト」と呼ばれる時間があり、体験学習を中心とするこの学校の特色となっています。

授業は1週間に29時間あり、そのうちの15時間がプロジェクトです。在籍する1年生から6年生は縦割りのクラス編制で、およそ25人の「プロジェクト」と呼ばれるグループになります。4月に自分のプロジェクトを選んだら、一年間、その教室でテーマに沿った学習をします。

クラスは、木工や家づくりを主におこなう「クラフトセンター」、染める、紡ぐ、カイコを育てるなど、衣生活にこだわった活動を通して歴史を学ぶ「むかしたんけんクラブ」。地域の食材を生かして料理をすることで学びをすすめていく「おいしいものをつくる会」、演劇を通して衣食住すべての活動を楽しみ、仲間意識を深めていく「劇団みなみ座」の4つ。

子どもたちは自分たちの活動を話し合いをして決めています。ミーティングをして決められた内容に従って、本物の仕事にとことんこだわった授業が展開されていきます。

具体的には、2012年度の活動は以下のようにまとめられます。



プロジェクト名	主なテーマと活動内容
クラフトセンター	木工…おもちゃづくり、渡り廊下の屋根づくり、大型遊具づくり
おいしいものをつくる会	料理…小麦栽培・収穫・製粉・加工 果樹栽培 ほうとうづくり
むかしたんけんクラブ	衣生活…蚕の飼育、製糸 土のかまどづくり かまど料理
劇団みなみ座	演劇…お化け屋敷づくり 舞台「くるみわり人形」の製作と発表
くらしの歴史館（中学校）	地域研究…人々のくらしを暴れ川「御勅使川」をたどり研究する

プロジェクトの時間にはさまざまな活動が展開されます。それぞれの場所で出来上がっていく作品の数は多く、アイデアいっぱいです。そこにはとびきりの笑顔もあります。

たとえば、木でできたおもちゃ、イスや机などの家具。大型遊具や木製トロッコ。紡いだ糸でつくったマフラー、カイコの飼育と繭糸づくり、フルーツ畑の仕事や収穫された果実の出荷、フルーツを利用した料理などなど。子どもたちの知的探求は広がり、数えきれないほどです。

さて、そこで働く教員たちはそれぞれのプロジェクトで活動が完結してしまうのではなく、教室間で、もっとお互いの活動を見せ合ったり、研鑽し合ったりできないかと悩んでいました。せっかくの子ども作品、子どもの気づきやアイデアを担当だけが知ってるのではもったいない、という感覚をもっていた教員もいました。もちろん職員室では、教員同士がそれを共有できているのですが、子ども同士が相互にかかわり合い、認め合う雰囲気づくりをしていけたら、もっともっと学校の魅力は増していくのではないかと考えました。

学校は教師から子どもへ知識を伝えるだけでなく、子どもから子どもへと知の伝達が活発に行なわれ、お互いの試行錯誤を子ども同士で認め合う場になってほしいと願ったのです。

2、本研究の意義 ～ユニークである部分～

授業の展開には必ず始まりがあり過程があって完結します。その活動にかかわる人は終始一貫して成り行きを見届けます。しかし部外者はその始まりと過程を伝えられず、結果だけを見せられる場合が多いでしょう。できれば活動の起承転結がわかり、その時にあったできごとや、子どもたちの思い、そこにいた人の息づかいや雰囲気までも残せないだろうか。知りたい人がとことん詳しく知られるよう配慮できないだろうか、と願いました。



むしろ、それはデジタルカメラやビデオで記録することで解決できるでしょう。私たちの学校でもそこまではできていました。問題はその後です。記録をした。では、それをどう、タイミングよく、学校のみんなが共有できるか、その方法を考えてみたいと考えました。それをつなぐのが学校内博物館（子どもたちによって「子どもの村博物館」と命名された）というアイデアでした。

3、研究の成果 ～活動の成果を広めるといった視点～

「えーっ！いいなあ、〇〇くんたち、こんなことしてるんだ」

「へー、こうやってできあがったんだ。〇〇ちゃんってすごい！」

博物館に集まった子どもたちのつぶやきが聞こえます。かじりつくように iPad にまとめられた写真アルバムをめくり、のぞき込む姿。一喜一憂して、はずんだ会話が聞こえます。

子どもの村博物館を準備したのは中学生たちでした。自分たちの地域研究の成果を編集してアフレコを加えたビデオを2本完成。自主制作した「中学生の一日」と題された映像が1本仕上がり、発表されました。

校内の博物館の開館に向けては、ICT機器を利用してスマートで、なおかつ、わかりやすい展示が可能になりました。保護者の方々にも、学校にとっても、子どもたちの姿を改めて見られるチャンスとなりました。子どもたちにとって、日頃の仕事ぶりを親に知ってもらうことはうれしいことのように



で、一緒に映像を見る親子の姿は微笑ましいものでした。

博物館の開催は多くの人に学校を知っていただける機会となっただけでなく、一方では学習活動そのものをダイナミックにしていく要素を与えてくれました。たとえば、準備をする過程で文章をうち込んだり、レイアウトを考えて棚づくりをしたり、本物の博物館の展示を研究しに出かけたりしました。また、中学生たちが写真の構図やビデオ編集などの技術を学び、ワイヤレスでwebストレージに保存した写真をipadに落としとしていたり、パ

ワーポイントをつかってつくったクイズが流れるようにしたり、学習活動に幅をもたらせてくれたのです。

4、研究の今後の継続性や発展について

年度末には、ICT機器（ipad、液晶テレビ）を学校から持ち出して、地域の図書館と博物館に設置させていただきました。地域の人々の目に触れる場所に展示をする意図は、開校したばかりの当校が地域の中に溶け込んでいきたいというところにあります。「中学生からみた南アルプス市の自然・文化・歴史」と題し、地域研究を進めてきた成果を自分たちの新鮮な驚きや感動とともに伝えるとともに、中学生たちの純粋さや誠実な仕事ぶり、素直な感覚が伝わっていくことは人々に安心感を与えることと期待しました。地域の人々にとっては、刺激的なできごとであるに違いありません。子ども博物館は、純粋な好奇心や探究心の発信基地となり、学校が地域を活性化していく場となるモデルとしても提案できます。

何よりも学校が最新のICT技術をうまく利用して、人々に楽しみを与える場として機能していくことで、地域が元気になっていくのではないかと期待しています。

【記述】

実践1 子どもたちの輪をICT機器がつなぐ

開催期間：2012. 7.17 - 7.21 場所：南アルプス子どもの村中学校
校舎1階

小学校4クラス、中学校1クラスの教員に協力していただき、夏休み前までの主だった子どもの活動と作品をすべて画像にしてパソコンに保存しました。それをipadの中に流し込み、スライドショーにまとめました。同時に、プロジェクターをつかって大きなスクリーンにクイズを映し出したり、御勅使川の源流を探索した画像にアフレコをして映像制作をして上映しました。「子どもの村博物館」と命名され、子どもが館長をつとめ、学校の保護者と子どもたちがあわせて200人



程度来館しました。来てくださった人の反応はよく、コンテンツよりもその場を楽しんでいたことが印象的でした。

実践2 子ども同士が刺激し合う

開催期間：2012. 12. 17 - 12. 21 場所：南アルプス子どもの村中学校校舎1階

冬休み前にオープンした子どもの村博物館は、さらに内容が充実していました。液晶テレビに映し出される映像も3つ用意され、各クラスの子どもたちが出版しているクラスの雑誌も並んで賑やかになりました。何よりも、来館するお客さんの反応が期待通りで、その内容に触れたたくさんの方のつぶやきや感動の声が多く聞こえてきました。学校の保護者だけでなく、学校に見学を訪れた方もいらっしゃって、あわせて200人程度の来館者がありました。



子ども同士が、友だちの活動する様子を知って、刺激を受け、自分を振り返る様子が印象的でした。

実践3 子どもが地域に発信する

開催期間：2013. 3. 15 - 4月下旬予定（現在開催中）

場所：ふるさと伝承館・ふれあい情報館（南アルプス市の公共施設）

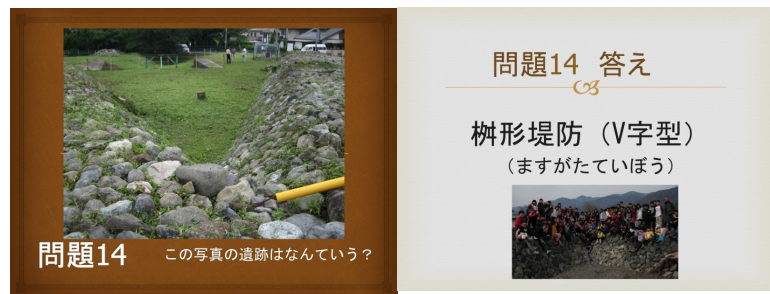
中学生のクラスでは「子どもの村博物館」を学校の外で開いてみる企画がすすみました。この1年、南アルプス市教育委員会に協力をいただき地域の歴史学習を進めてきた経緯もあり、文化財課にも後援していただくことになりました。

展示は「中学生が見た南アルプスの歴史・自然・文化」に焦点を絞り、これまでに撮り貯めた写真データや映像、聞いた話や調べた内容を整理して見ていただけるように工夫しました。中学生が「月刊歴史館」として、毎月一冊、本を発行してきた経緯もあり、スキャナを使って資料を整理したり、短くわかりやすいように文を書き直したり、準備には時間がかかりました。できあがった一冊を文化財課の職員のみなさんに見ていただき、修正は3回にわたりました。



発行した月刊誌
（全11巻）

この展示企画のねらいは3つありました。一つは中学生の学習の成果を発表する、ふたつ目は地域の



ふるさと伝承館のipadクイズの一例

の魅力を再発見していただく機会づくり、3つめは地域の人々に歩み寄り、学校が地域の中になじんでいきっかけづくりです。展示期間は長く、来館者は、これまでとは桁が違います。学校の関係者ではない人たちが、立ち止まり、見ていただけるように工夫を施

そうとしました。クイズを40問完成し、ipadを多用したり、映像として流したりしています。

現在、立ち止まって画面をのぞき込むお客様やクイズを解こうとipadを指でフリップして楽しむ大人や子どもの姿が見られています。



ふれあい情報館の展示スペース



ふるさと伝承館のipadクイズコーナー